

スマトラ沖地震津波のその後 タイ国・ナムケン村

著者	金田 英子
著者別名	KANEDA Eiko
雑誌名	スポーツ健康科学紀要
号	10
ページ	91-95
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.34428/00004196

スマトラ沖地震津波のその後 —タイ国・ナムケン村—

金田 英子

After Sumatora-Andaman earthquake and tsunami—Nam Khem village in Thailand—

KANEDA Eiko

はじめに

2004年12月26日にスマトラ島沖を襲った地震は、タイ国に史上初の津波被害をもたらした。7年8か月後の2012年8月、最も被害が大きかったといわれている地域を視察したので報告をする。

調査地の概要

タイ国南部に位置するパンガー（Phang Nga）県、タクアパー（Takuapa）郡、ムアン（Muang）区、ナムケム（Nam Khem）村は、世帯数841世帯、人口3,939人の漁村である。ムアン区には、8村があり、その一つにナムケム村がある（地図1）。

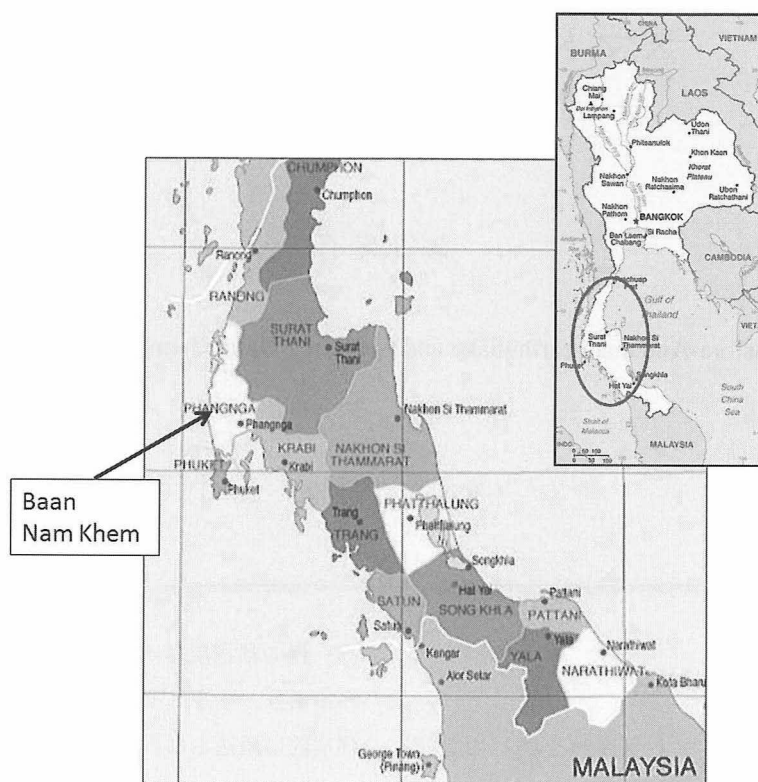
ムアン区のヘルスセンターは、ムアン村とナムケム村の2か所にある。ナムケム村のヘルスセンターは、通常8時半から4時半までで、4名のスタッフで対応している。現在45名のVHV（Village Health Volunteer）が、1人約15世帯を担当し保健衛生に関する業務を遂行している。タクア

パー郡の郡病院はナムケム村から約10kmのところであり、ヘルスセンターで対応できない場合は郡病院に搬送される。

当時の津波被害状況

スマトラ沖地震津波の被害状況の最終報告は、出典によって異なっている（表1）。しかしタイ国南部の西海岸一体が被害に遭遇し、最も大きかったのがパンガー県で、死者が4,000人を超えていることでは共通している。

ナムケム村長の妻からの聞き取りによると、正確な記録は残っていないが、ナムケム村周辺では津波当時、約1,300人が死亡した。地震直後、海岸の潮がこれまでになく引き魚が跳ねるといった初めての体験に、わざわざ海辺まで様子を見に行った人が多く、そのことが被害を拡大させたという。また津波の被害を受ける以前は1,000人以上のミャンマー人が出稼ぎに来ていて、漁船一隻に約20～30人のミャンマー人が乗船し漁をしていた。津波後はタイの軍隊がミャンマー人を保護し



地図1 ナムケム村の位置

たが、ミャンマー人の被害状況の詳細は不明のままであるという。

ヘルスセンターは、震災直後は閉鎖された。スタッフは、ムアン村のヘルスセンターへ行き対応した。仏教国で信仰心が厚いことから、収容された遺体は、みな寺院に安置された。タイの TTVI (Tsunami Victim Identification) 組織によると、遺体の身元確認の多くは歯科所見 (85.5%)、次いで指紋で識別された (12.6%) との報告があるが¹、ナムケム村での具体的な方法については聞き取ることができなかった。

当時のニュースでは、南部被災地では親を失った津波孤児が300人に上っていると厚生省が発表している。さらにスラキアット外相は、被災地の病院で子供が人身売買業者にさらわれたとの報告を受けていることを明らかにした²。津波の災害急性期にあった仮設小屋の掲示では、パンガー県

の津波孤児は469人、タイ南部6県の合計は871人との報告がある³。ナムケム村での聞き取り調査では、人身売買の具体的な話は聞かれなかったが、最終的に震災孤児が30人いた。そのいっぽうで、NPO 法人プラティープ財団がいち早く孤児院を設立し、津波孤児の救済にあたった⁴。

電気、電話、水道のライフラインは、すべて止まった。水は、2日後に来た。情報は、ラジオから得ていた。プーケット島の車両が入らないところでは、象を使って遺体運搬などを行った。

ナムケム小・中学校

今回、ナムケム小・中学校・校長にインタビューを行った。

タクアパー郡には、6地区に20の小・中学校がある。ナムケム村には、幼稚園から中学校までが、同じ敷地内にある。1976年に小学校が設立さ

表1 パンガー県の津波被害

県名	資料 番号	死亡者数				負傷者数			行方不明者数		
		タイ人	外国人	国籍不明	合計	タイ人	外国人	合計	タイ人	外国人	合計
Phang-nga	1	1,950	2,213	—	4,163	4,344	1,253	5,597	—	—	2,113
	2	1,266	1,633	1,325	4,224	—	—	—	—	—	—
	3	1,135	934	2,156	4,225	4,344	1,253	5,597	1,611	324	1,935
Krabi	1	288	188	—	476	808	568	1,376	—	—	890
	2	357	203	161	721	—	—	—	—	—	—
	3	345	191	185	721	808	560	1,367	383	393	776
Phuket	1	154	105	—	259	591	520	1,111	—	—	700
	2	151	111	17	279	—	—	—	—	—	—
	3	168	111	—	279	591	520	1,111	261	385	646
Ranong	1	167	2	—	169	215	31	246	—	—	12
	2	156	4	0	160	—	—	—	—	—	—
	3	157	2	—	159	215	31	246	12	—	—
Trang	1	3	2	—	5	92	20	112	—	—	1
	2	3	2	0	5	—	—	—	—	—	—
	3	3	2	—	5	92	20	112	1	—	—
Satun	1	6	0	—	6	15	0	15	—	—	0
	2	6	0	0	6	—	—	—	—	—	—
	3	6	—	—	6	15	—	15	—	—	—

出典

資料1. Effect of the 2004 Indian Ocean earthquake on Thailand (http://en.wikipedia.org/wiki/Effect_of_the_2004_Indian_Ocean_earthquake_on_Thailand) (2012年12月12日)

資料2. Department of disaster prevention and mitigation, Ministry of Interior (as of 24-3-05)

資料3. Khao Lak にある Tsunami Boat Memorial 内にある掲示 (2012年8月)

れた。ほぼ同時期に幼稚園も設立された。1990年には中学校が設立され、以後、幼稚園から中学3年までとなった(写真1)。現在の在籍数は、表2のとおりである。主な通学範囲は、ITV [約6km]、プルティア村 [約10km]、ココオ村 (Kho Khao) [離島] などである。教員は19人(うち3人が2012年8月末に退職)で、教員の出身地は全員タクアパー郡である。高校は、10km 離れたところにある。

ナムケム村の小・中学校は、災害当時、休日だった。したがって、児童生徒の安否確認は、教員が家を訪れたり、人づてに聞いたりして行われ

た。当時、400人以上の児童生徒、23人の教員がいた。うち、29名の児童生徒が死亡した。教員は、村外からの通勤で、この日は休日だったため全員無事だった。

年に1回(11月)、防災訓練を地区で実施している。2012年は、県レベルでの防災訓練が7月に実施された。よって、年2回の防災訓練が実施された。内容は、応急処置の講習会、放送による高い所への非難、保護者への防災知識教育などである(写真2)。

表2 ナムケム村小・中学校の在籍数

小学校	男	女
1	16	8
2	7	10
3	10	15
4	17	9
5	14	8
6	14	12
計	78	69
中学校	男	女
1	13	9
2	5	4
3	5	3
計	23	16

<2012年8月現在>

現在の地域の状況

震災直後、コミュニティーセンターの横に立てられた仮設住宅は、現在もそのままの状態、1家族だけが使用していた（写真3）。

ところでタイ国では、2003年に政府系のコミュニティ組織開発機構（Community Organizations Development Institute, CODI）の支援を受け、全国の都市貧困層2,000地区30万世帯の住環境改善を行うことを目的に、バンマンコンプログラム（Baan Mankong Program, BMP：安心できる住まい計画）[以下、BMP事業]を開始している。タクアパー郡内の復興計画でもBMP事業が導入されていた。

収容された遺体が保管された寺院は改築され、生涯経典を唱える僧侶たちが集団生活をしている。

ナムケム村にある“Tsunami memorial”は、陸に乗り上げられた漁船を、そのまま展示している（写真4）。

震災当時、遺伝子解析を実施した施設や身元不明の遺体が埋葬された場所は、その後国立メモリ

アルパークとなったが、今ではすべての施設が閉鎖され、墓地も草に覆われていた（写真5）。

津波後にNPO法人プラティープ財団によるムアン郡の津波孤児施設にいた子どもたちも、今ではみな自立し、施設に職員として勤務している者もいた。その施設は、現在も孤児院としての機能を継続させ運営している⁵。

毎月、1日と15日にスピーカーが正常に機能しているか確認をするため、防災マイクから国家を流している（写真6）。しかしながら防災マニュアルの類は確認できなかった。

結びにかえて

スマトラ沖大地震から8年が経過した。ナムケム村の道路脇には、何か所か、避難ルートを示す看板があったが表示が薄れ、中には読めないものもあった。穏やかな波打つ海岸に建てられた津波メモリアル公園では、セバクロウに夢中になっている地元の人たちがいた。公園までの道にある避難経路を示す看板は、ところどころ文字が消えていて、当時の記憶の風化を象徴しているようだった。

謝辞

本調査の現地案内をしていただいた、プラティープ財団のNom Manochantr博士と通訳の吉田圭助氏、さらに現地視察を全面的にサポートしていただいた川澄厚志氏にお礼申し上げる。

<参考文献>

1. Pongruk Sribanditmongkol, Porn Pongpanitanont, Nop Porntrakulseree, Maythinee Petju, Supachai Kunaratanapruk, Pattana Kitkailass, Pornpraseart Ganjanarintr, Nopadol Somboonsub, *Forensic aspect of disaster casualty management Tsunami Victim Identification in Thailand* (http://www.who.int/hac/events/tsunamiconf/presentations/2_16_forensic_pongruk_doc.pdf) (2012年12月現在)
2. http://nna.jp/free/tokuhou/041227_jkt/141_150/b149.html (2012年12月現在)

3. 岡田敏夫, 北角哲, 佐藤正喜, 遠藤環, 澤田正幸, 伊藤伸秀「スマトラ沖地震津波による南タイの被害状況, 支援協力及び復興状況の視察」2005年（非公開）

4. Duang Prateep Foundation. Life after the waves (article not for sale)

5. <http://dpfjp.thaiict.org/> (2012年12月現在)



写真1 ナムケム村の小・中学校



写真2 防災訓練の様子



写真3 津波被害直後の仮設住宅



写真4 津波メモリアル



写真5 メモリアルパークの墓地



写真6 防災無線塔